ごあいさつ

宝塚市立歴史民俗資料館　旧和田家住宅は、摂津・丹波型と呼ばれる妻入角屋本瓦葺の住宅で、居室部は、角屋座敷のほか、三室二列の六間で構成され、納戸構の構造など古式な様相を持つことから、江戸時代の中頃までに築かれた宝塚市内最古の民家遺構の一つであると推せられています。

当家は代々、旧米谷村の庄屋をつとめていたことから大量の古文書も有しており、宝塚市の建築史や近世史を探るうえで欠くことのできない家屋であるため、同敷地内にある土蔵とともに、平成8年4月25日に宝塚市の有形文化財に指定いたしました。

また、この建物は平成7年1月17日に起きた阪神・淡路大震災により被災し、半壊の状態でしたが、その後、神戸大学の方々により、被災箇所の詳細な調査を行っていただいたうえで、修理・保全工事を実施いたしました。

この修理にあたっても、神戸大学の黒田龍二先生をはじめとする専門家の方々の貴重な御意見をいただき、基本的に従来の古材を使用する方針で、修復を行いました。

なお、当家屋と土蔵及びその周辺の土地は、旧所蔵者である和田正宣氏から、平成8年11月に宝塚市へ寄贈をいただいたものでございます。和田氏の永年にわたる建物の保存への御尽力と、御好意に対し、深く感謝を申し上げます。

また、この建物の保存や活用を行うにあたり、御協力を賜わりました、建築関係者の方々や兵庫県教育委員会、ならびに開館にあたり御支援をいただきました地元の関係者の方々にも厚く御礼申し上げます。

宝塚市教育委員会

建物の間取りと特色

この建物は、主屋根の前に角屋の屋根が表側全体につくられているため、表側から見ると平入家のように見えますが、主屋は摂津・丹波型（片側土間に居室を並行して並べる建築様式）の平面を持つ妻入民家です。

主屋の桁行は八間半、梁行は五間半あり、その西側面の正面寄りに三間×二間半の角屋（主屋の棟に対して直角の棟を持つ家屋）が付加されたやや特殊な間取りとなっています。

内部の居室は角屋部分を除いて、三室二列の六室からなり、発達した間取りをしています。

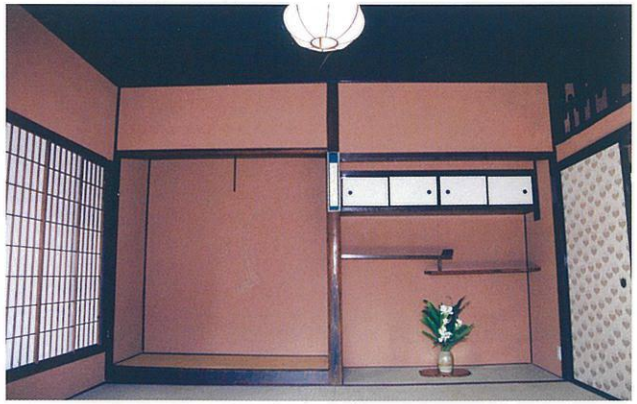
表側は北側の道路（旧有馬街道）に面して玄関・次の間・座敷が並行に並んでおり、座敷には床・平書院・違い棚・天袋を備えています。さらに、玄関の間の正面側は、もともと式台（客と送迎の挨拶をする板敷きの場所）として使われていたと考えられています。

また、「へや」「なんど」と「ちゃのま」「板間」の間は約20センチメートルの高さで仕切られていました。この高敷居は「納戸構」と呼ばれるもので、これも古い様式を示すものです。

土間部分は側回りが大きく改造されていますが、玄関の東脇には内厩があったようで、馬栓棒穴などが残っています。また台所部分や風呂は大きく改築されており、旧状が不明な点が多く、現状のわかる範囲で復元を行っています。

屋根は一部、桟瓦葺ですが、本来は本瓦葺であったようで、勾配の緩やかな屋根となっています。小屋組はサス組で、古式な家屋の様相を残しています。

このようなさまざまな構造から当家屋は、江戸中期の庄屋としての機能を有した建物であったことがわかります。



座　敷

旧米谷村と和田家文書

旧摂津国川辺郡米谷村の和田家には多くの文書が残されており、約4，000点の古文書が見つかっています。

これらの古文書のうち、最も古い記録は「文禄検地帳」（延享元（1744）年写し）で、文禄三（1594）年のいわゆる太閤検地の米谷村域の写しです。

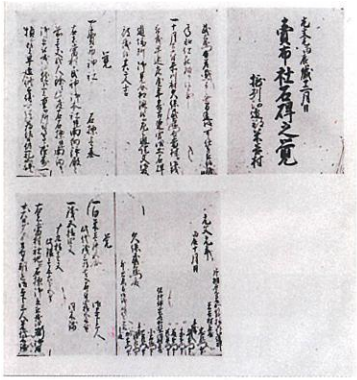
また、寛永十（1633）年八月の「田畑譲り状」のほか、検地帳・名寄帳・免定・触書留・訴状控類・土地売買証文・争論関係史料など、特に近世中・後期の庄屋文書が数多く残されています。

近世の米谷村は当初、江戸幕府の直轄領でしたが、慶長十九（1614）年に村の一部が大和小泉藩片桐氏領になり、残りの部分も慶安元（1648）年に上総飯野藩保科氏領になっています。この両藩の入組支配は幕末まで続きますが、和田家は飯野藩領の庄屋をつとめ、明治期になると引き続いて米谷村の戸長をつとめています。

和田家に残る古文書は、このような関係から飯野藩関係のものが主で、免定（領主からその年の年貢の高を記して下された文書）などが多く、また「御触書并訴状控」が天明二（1782）年以降、幕末までほぼ残っており、村方の状況を知るうえで貴重な史料です。また、隣接する宿駅・小浜と米谷村の争論関係の史料もあります。

さらに、既に『宝塚市史』にも記載されているように、米谷村の「寺社改帳」や、市の指定文化財となっている「売布社石碑之覚」など当時の村況を知るうえで貴重な史料も残されています。

明治以降も「兵庫県布達」が明治五（1872）年から十（1877）年まで残っており、宝塚市の近世史や近代史を探るうえで欠くことのできない史料として、質・量ともに重要なものとなっています。



和田家文書